

昭和61年度～昭和63年度
春日市埋蔵文化財年報

2023

春日市教育委員会

序

春日市は福岡平野の奥まった位置にあり、福岡都市圏に隣接する立地環境から昭和30～40年代の高度経済成長期以降、良好な住宅都市として発展してきました。昭和47年の市政施行時には5万人に満たなかった人口はその後増加の一途をたどり、現在では約11万人の市民を擁する都市に成長しています。

人口の増加に伴い市域の開発も大きく進展したことから、埋蔵文化財の発掘調査件数も増加傾向が長く続く一方、この間の貴重な発掘調査成果の一部については正式な発掘調査報告書として公表されないまま、未完の調査報告書件数が累積してしまったことは深刻な課題です。

このような状態を是正するため、春日市教育委員会では平成3年度以前の埋蔵文化財年報を発刊する取り組みを令和3年度から5ヶ年計画で実施することとしました。

本書は昭和61年度から63年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査のうち、発掘調査報告書が未刊行の調査分についてその概要をまとめたものです。貴重な埋蔵文化財の発掘調査報告書としては不十分との誹りを免れるものではありませんが、市民の皆様を始め少しでも多くの人々に活用され、地域の文化財への理解を深める一助となれば幸いです。

令和5年3月31日

春日市教育委員会
教育長 扇 弘 行

目 次

I	文化財保護事業の現状と組織	1
II	発掘調査の概要	
1	九州大学・御供田遺跡（3次調査）	2
2	天神ノ木遺跡（2次調査）	4
3	百堂遺跡（1・3次調査）	8
4	下ノ原遺跡（1次調査／下白水大塚古墳）	12
5	須玖永田B遺跡（1次調査）	15
6	百堂遺跡（2次調査）	19
7	柏田遺跡（1次調査）	22
8	宮の下遺跡（1次調査）	24
9	浦田遺跡（1次調査）	28
10	大牟田遺跡（1次調査）	30
11	寺屋敷A遺跡（1次調査）	34

例 言

- 1 本書は、春日市教育委員会文化財課が昭和61年度から昭和63年度に行った発掘調査のうち、調査報告書未刊行の調査についての概要をまとめたものである。
- 2 本書に使用した写真の一部は発掘調査担当者のほか、有限会社空中写真企画の撮影による。
- 3 本書の執筆、編集は吉田佳広が行った。

I 文化財保護事業の現状と組織

春日市では昭和 52 年度以降、埋蔵文化財の保存、保護に伴う発掘調査体制として教育委員会に文化財係を発足させ今日に至った。土地開発や土木、建築工事等によって埋蔵文化財が周知されることなく破壊されることを避けるために、埋蔵文化財の包蔵が予想される土地において土木工事が計画された際は事前の試掘調査を行い遺跡の存否を確認するとともに、現状での保存ができない埋蔵文化財については発掘調査による記録保存を行ってきた。

昭和 61 年度の各種開発における試掘調査の依頼件数は 39 件である。このうち現地での試掘調査の結果、埋蔵文化財が発見され文化財保護法の規定に基づき本調査を実施したのは 7 件である。

昭和 62 年度の各種開発における試掘調査の依頼件数は 94 件である。このうち現地での試掘調査の結果、埋蔵文化財が発見され文化財保護法の規定に基づき本調査を実施したのは 7 件である。

昭和 63 年度の各種開発における試掘調査の依頼件数は 50 件である。このうち現地での試掘調査の結果、埋蔵文化財が発見され文化財保護法の規定に基づき本調査を実施したのは 11 件である。

文化財行政にかかる組織体制は次の通りである。

昭和 61・62 年度		昭和 63 年度	
教育長	三原 英雄	教育長	三原 英雄
教育部長	西田 謙	教育部長	西田 謙
社会教育課長	諸岡 泰三	社会教育課長	矢野 文一
文化財係長	大楠 泰幹	文化財係長	鬼倉 芳丸
主任主事	増永 瞳司	主任主事	増永 瞳司
技師	丸山 康晴	技師	丸山 康晴
	平田 定幸		平田 定幸
	中村 昇平		中村 昇平
嘱託職員	草場 洋子	嘱託職員	吉田 佳広
	池田 洋子 (62 年度)		池田 洋子

II 発掘調査の概要

1 九州大学・御供田遺跡（3次調査）

所在地 春日市春日公園5丁目19番

調査面積 648 m²

調査期間 1986年7月10日～7月31日

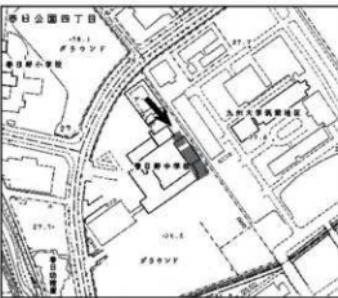
九州大学・御供田遺跡は春日市の東部にあり、牛頭川右岸の小丘陵および低位段丘上に立地する。遺跡の時期は弥生時代を中心とするが縄文時代から古代・中世にかけての多様な遺構群で構成され、複合的な様相を呈する。

春日野中学校建設に伴い緊急発掘調査を実施した。

遺構・遺物

当該調査で検出した遺構は溝2条と土坑2基である。遺構検出面の標高は約28.2mであるが、調査区内は米軍基地造成による擾乱・削平が著しい。2区では全く遺構を確認できなかった。

1号溝は幅4m前後、深さ約0.3mを測り、断面形状が逆台形を呈する溝で、調査区を直線的に東西方向に横断する。弥生時代後期～古墳時代初頭に埋没したと見られる。調査区北隅に検出した2号溝は



1. 調査地の位置 (1/5000)



2. 調査区全景 (北から)

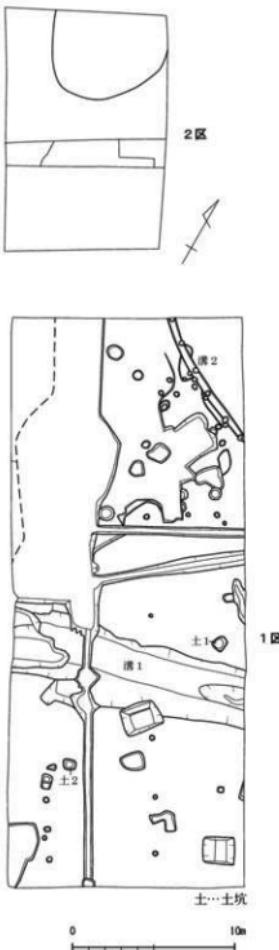
幅0.6m前後、深さ10cm程度の浅い溝で、北西側にやや低く傾斜する。1号土坑、2号土坑とも概ね隅丸方形を呈する。深さは約15cm程度で、底面はほぼ平坦である。弥生後期の土器片ほか須恵器小片がわずかに出土している。

小 結

出土遺物から遺構の時期は弥生時代中期から古墳時代初頭と考えられる。遺構の密度は低く、当地は集落の中心から外れた縁辺部に当たるものと考えられる。しかし、1号溝については、弥生時代から歴史時代にかけての多くの溝をはじめ住居跡など集落関連の遺構が発見された東方の九州大学筑紫キャンパス内に向かっており、注意を要する。



3. 調査区全景（西から）



4. 遺構配置図 (1/300)

2 天神ノ木遺跡（2次調査）

所在地 春日市上白水7丁目12・15番・14番北半部

調査面積 1,161 m²

調査期間 1986年11月11日～12月17日

天神ノ木遺跡は春日市域の南西部にあって春日丘陵西側に広がる中位段丘上に立地し、中白水遺跡の南側に連続するよう接する。弥生・古墳時代から中世に至る複合的な遺跡群であり、上白水遺跡群の中核部分として位置づけられる。2次調査地点は、昭和59年の発掘調査により弥生時代中期の集落遺構が確認された1次調査地点の南方約50mの位置にあり、遺構検出面の標高は約31.2mを測る。これまで水田であった土地の住宅地造成に伴って実施した緊急発掘調査である。

遺構・遺物

2次調査では、竪穴住居跡6軒、掘立柱建物跡4棟以上、土坑8基（貯蔵穴2含む）、溝3条、石蓋土壙墓1基、石棺墓1基、ピット多数などを検出した。これらの遺構は弥生中期から古墳時代初頭にかけて営まれており、竪穴住居跡については調査区北東隅に検出した5号竪穴住居跡が弥生時代中期前半



1. 調査地の位置 (1/5000)



2. 調査区全景（上が北）



3. 3号竪穴住居跡（北から）

の円形住居跡と考えられるが、他は後期以降のものである。検出した竪穴住居跡の深さは深いものでも 20 cm 前後で、5 cm 以下のものもあり、後世の耕作などにより当地は本来の地形が 50 ~ 60 cm ほど削平されているものと推察される。

3 号竪穴住居跡は 4.5×3 m の長方形を呈し、両端にベッド状遺構を設える。主柱穴は 2 個で、中央に炉、南辺に不整形な屋内土坑が造られている。4 号竪穴住居跡の規模は 4.5×3.5 m で、西辺に 40 cm ほどの張出し部を設けている。主柱穴は 2 個、炉跡は確認できなかつた。貼り床により床面を整えている。6 号竪穴住居跡は東半部が調査区外に伸びだしているが、炉跡の位置から推察すると規模 4.4×5.4 m 前後で 2 本の主柱を持つ方形住居跡と考えられる。南辺に屋内土坑、西辺に平面形 L 字型のベッド状遺構が設けられる。

1 ~ 4 号掘立柱建物はいずれも 1 間 \times 2 間の 6 本柱の建物と見られ、弥生時代後期に竪穴住居と並存していたと考えられる。

貯蔵穴と考えられる土坑は、調査区南部に



4. 3号竪穴住居跡 手鎌出土状況



5. 1号掘立柱建物跡（東から）

検出した。弥生時代中期のものと見られる。7号土坑は直径約1.7mの円形を呈し、検出面から床面までの深さは約90cmである。8号土坑は平面規模約3.1×2.7mの方形を呈し、検出面から床面までの深さは約15cmである。

調査区中央付近を東西方向に走る3号溝は、幅1.5m前後、深さ約0.7mを測る断面形が逆台形状の溝で、溝底は東側に向かって低くなり、弥生時代中期末ごろの土器資料がまとまって出土している。

これらの遺構から出土した遺物は弥生時代中期から後期にかけての土器が主体を占めるが、古墳時代初頭の土師器が含まれるほか、遺構上面の遺物包含層には6世紀代の須恵器片も少量認められた。注目される遺物には、3号竪穴住居跡から出土した鉄鎌があげられる。

小 結

遺跡の性格は弥生～古墳時代の集落の跡であり、大量の土器が出土した。また、わずかではあるが墓地も認められた。遺跡は全域にわたって確認されたが、調査区南部では遺構の密度は低くなる傾向にある。これに対し中央部から北部にかけては、近現代の搅乱坑によって破壊された部分が多いものの、遺構の密度が比較的に高い。特に3・6号竪穴住居跡などの方形住居跡の貼り床下のピットなどから弥生前期末～中期初頭の土器片がみられることから、1次調査地点を含めた周辺には、弥生時代中期前半以前に営まれた集落が広がる可能性が高いものと推察される。



6. 7号土坑（北東から）



7. 3号溝（東から）



8. 1号石蓋土塚（西から）



9. 遺構配置図 (1/200)

3 百堂遺跡（1・3次調査）

所在地 春日市白水ヶ丘2丁目73・79・80・97・98

番ほか

調査面積 2,885 m²

調査期間 1987年10月8日～12月5日（1次調査）

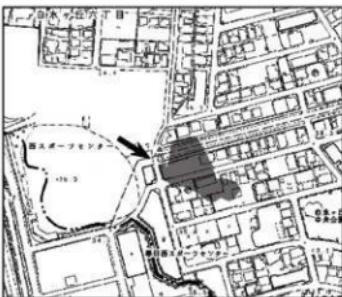
1988年4月11日～5月19日（3次調査）

百堂遺跡は春日市の南西部にあり、那珂川へ突出した丘陵中央部の中位段丘上に位置する。

上白水地区の区画整理に伴う緊急発掘調査であり、調査後は地形を削平する宅地造成や道路敷設が行われ消滅した。調査年次は異なるが1次・3次調査については調査範囲が連続するため併せて報告する。また、遺跡名称は発掘調査時には百堂遺跡A地点としていたが、平成16年の春日市遺跡地図作成に伴って各遺跡範囲の整理・見直しが行われ、この際に百堂遺跡B地点と統合され、百堂遺跡と改称した。

遺構・遺物

検出した遺構は円墳5基（5世紀末～6世紀後半）、土壙墓8基（7世紀代）、甕棺墓1基、土坑7基、歴史時代の溝10条、ピット多数である。古墳の周溝や主体部周辺から銅剣、鉄器類、ガラス小玉、碧玉製管玉、耳環、須恵器、土師器等が出土している。



1. 調査地の位置 (1/5000)



2. 1次調査地全景 (南東から)



3. 3次調査地全景（東から）

円墳5基のうち1号墳が最も遺存状態が良く石室天井部は持ち去られていたが、墳丘の規模、石室構造はほぼ把握できる。周溝は径13.5mで南方に陸橋が存在する。主体部は竪穴系横口式の石室で、石室の内部は 1.4×0.8 mを測り、長さ約1mの羨道が南に開く。墳丘頂部は削平されていたが、周溝検出面から約1.5mの高さの墳丘盛土が残っていた。

2～5号墳は全て盛土が削平されており遺存状況が悪いが、周溝底面はほぼ完存しており、古墳の規模についてはある程度把握することができる。周溝は4基とも径12～13mで南方に陸橋が存在する。主体部等も含め1号墳とほぼ同様の構造であったことが想定される。3・5号墳は下部の石材が残存するが、4号墳は石材の抜き跡を確認したのみである。古墳からの主な出土遺物としては、1号墳から銅鏡、鉄鎌等の鉄器、管玉、ガラス小玉、5号墳石室から铁刀、ガラス小玉、完形の須恵器及び土師器が出土し、5世紀後半に築造されたものと推測される。3・4号墳の主体部には全く遺物は存在せず、床石がほと



4. 1号墳石室（南から）



5. 3号墳（南西から）

んど除去されていることから盜掘時に全て持ち去られたものと判断される。なお、周溝内には若干の土器が確認され、5基の古墳ともほぼ同時期に築造されたものと考えられる。

1号墳の東側に検出した號棺墓は、弥生時代中期後半の甕形土器を単体で用いた小児棺で、木製の蓋がされていたと考えられる。

この他の遺構としては溝、土坑、ピットがあるが、出土遺物が乏しくその性格等については明瞭ではない。古墳の周溝を切る7号溝などからは、歴史時代の土器が僅かに出土している。他の溝についても同様の時期のものと推察される。土坑は出土遺物が少なく時期を判断し難いが、縄文土器（押型文土器）の小片のみを含むものがあり、当該期の遺構も2～3存在する可能性がある。ピットは調査区全体に分布し、古墳の周溝及び石室掘方に切られたものが多く、したがって5世紀以前の遺構と判断される。これらのピット群については建物跡と推定される配置をなすものは存在しない。

小 結

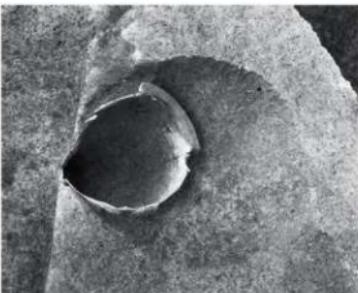
百堂遺跡が立地する丘陵の先端部には原遺跡の古墳群があり、後方にはウトグチ古墳群（ウトグチA遺跡・C遺跡）が存在する。時期的にはウトグチ古墳群が最も古く、次に原古墳群が築造され当遺跡所在の古墳群が後出する。周辺の旧地形の状況等から推察すると、今回調査の範囲は遺跡の周辺部に当たり、遺跡の中心部はおそらく南方へ広がるものと予想され、本来はかなり広範囲にわたって縄文時代の生活跡及び古墳～歴史時代の遺構が存在していたものと推測される。



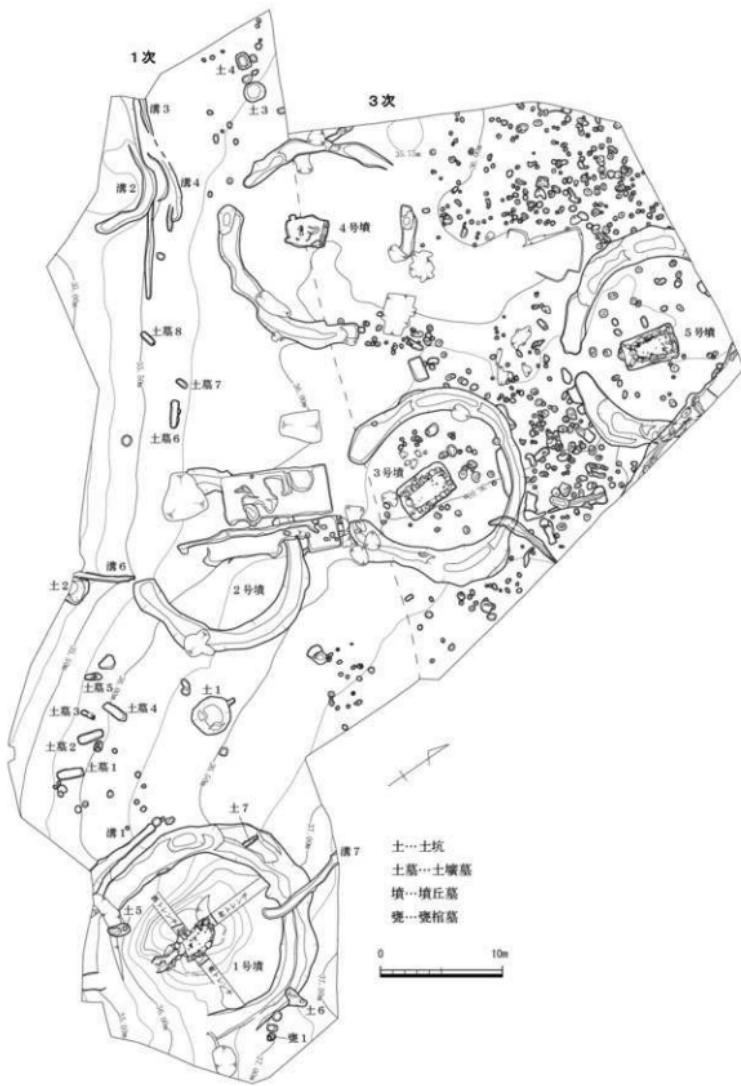
6. 3号墳主体部（東から）



7. 5号墳遺物出土状況（南から）



8. 5号墳遺物出土状況（南東から）



9. 遺構配置図 (1/400)

しもの はる
4 下ノ原遺跡（1次調査 / 下白水大塚古墳）

所在地 春日市下白水北5丁目98番ほか

調査面積 60 m²

調査期間 1987年11月8日～1988年1月16日

下ノ原遺跡は春日丘陵南西部の中位段丘上、東西約210m、南北約140mの範囲に所在する。遺跡の中心部には下白水大塚古墳と呼ばれる前方後円墳が存在し、その周囲には弥生時代から古墳時代にかけての集落関連の遺構が確認されている。



1. 調査地の位置 (1/5000)

下白水大塚古墳については近世以降、近年まで下白水地区の共有墓地として地域で管理されていた。1961年の町道拡幅によって古墳前方部が一部削平された際に、人形土製品等の祭祀具が複数点出土していたが、古墳の詳細な実態については長く未解明なままであった。昭和60年頃から高まってきた下白水大塚古墳の保存管理に関する地区的要請に応えるに当たって、古墳の範囲や隣接地との境界等を明確にする必要があるため、古墳の内容確認を目的とする試掘調査を実施した。

遺構・遺物

後円部の裾部に4箇所（A・B・C・Gトレンチ）、墳丘上に3箇所（D・E・Fトレンチ）の試掘坑を設定し、確認調査を実施した。近現代の墓地による搅乱が著しく、試掘坑内の平面的な遺構検出状況では周溝の掘方プランを見出し難いが、試掘坑壁面の土層観察により、幅約3m、深さ1m前後の溝



2. Aトレンチ全景（東から）



3. Cトレンチ全景（南から）

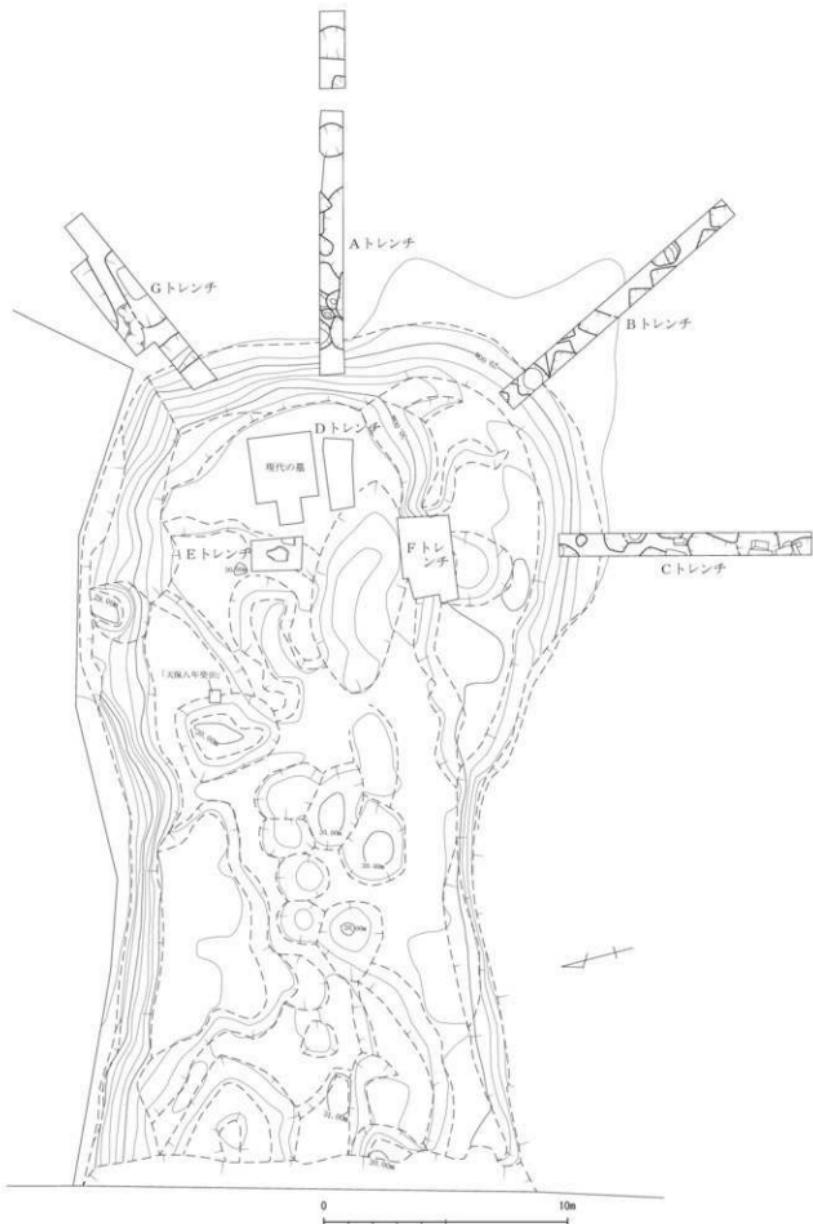


4. Fトレンチ全景（南西から）

が後円部を取り巻いていたことが分かる。前方部側についても恐らく同様の状況と推察される。一方、墳丘上のFトレンチでは南西方向に開口する石室羨道部が確認され、この羨道内に副葬品の一部と考えられるガラス小玉と鉄器が各1点検出された。また、寛永通宝1枚も出土しているが、これは古墳盗掘時に流入したものか、近世墓地に伴っていたものか判然としない。今回の範囲確認調査で後円部側の周溝と横穴式石室の一部が確認された。

小 結

調査時は試掘坑の設定個所などに制約があり十分な確認調査が行えなかったため、不明な点を多く残しているものの、古墳の規模、埋葬主体部の構造等については凡そ把握することができた。墳丘上と前方部側はこれまでの土地利用により著しく削平されており、現存する墳丘の規模は長さ約36m、後円部径約22m、後円部・前方部とも高さ約3mであるが、周溝を含めた全長は47m程度と推察される。石室は横穴式石室で、その構造から6世紀代に築造されたものと考えられる。



5. 遺構配置図 (1/200)

す ぐ え い だ 5 須 玖 永 田 B 遺 跡 (1 次 調 査)

所 在 地 春日市岡本1丁目33番

調査面積 733 m²

調査期間 1988年4月1日～7月31日

須玖永田B遺跡は春日丘陵北方に広がる沖積地に立地し、諸岡川南岸の標高17m前後を測る。調査地点は須玖遺跡群の中に含まれ、奴国王墓や王族墓が存在する須玖岡本遺跡岡本地区の北約250mに位置する。弥生時代の青銅器生産に関する遺物や工房とされるものを含む掘立柱建物群が確認された須玖永田A遺跡は東約150mにあり、弥生時代後期から終末期にかけての掘立柱建物群や副葬品を伴う墓地を検出した須玖唐梨遺跡は当地の北約150mの位置にある。今回の発掘調査は共同住宅建設に伴う緊急発掘調査で、調査後、建物建設部分の遺構は消滅したが、駐車場部分の地下については遺構の分布状況確認に止めており、甕棺墓や竪穴住居跡等の遺構が保存されている。

遺構・遺物

当遺跡の調査について当初は前述の遺跡と同様な低地に立地しているため掘立柱建物群を中心とする遺構を想定していたが、調査の結果は甕棺墓を中心とする墓地群であった。掘方の発掘により内部を確認した遺構には、甕棺墓155基、土壙墓4基、土坑14基、溝3条、弥生時代後期の竪穴住居跡、掘立柱建物がある。また、調査区の中で遺構が破壊から免れるため、存在有無の確認に止めた北側1/4の範



1. 調査地の位置 (1/5000)



2. 調査区南西半部 (南東から)



3. 調査区北東半部 (南東から)



4. 調査区中央部（北東から）



5. 調査区南西半部（北西から）

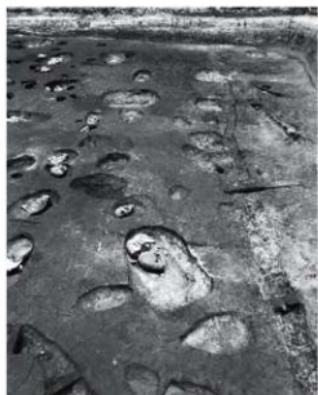
囲には凡そ 20 基以上の甕棺墓と 1 ~ 2 軒の住居跡、5 ~ 6 基以上の土坑等が存在するものと見られる。

甕棺墓については、大半が弥生時代中期前半から後半にかけてのものだが、後期初頭のものもわずかに認められる。低地のため甕棺墓中に人骨の遺存は全く認められなかった。また約 6 割程度が小児用甕棺墓である。土壙墓についても甕棺墓と同様の時期と考えられる。土坑の中には調査区の中央部西側の 3 箇所で検出した土器廃棄坑が含まれるが、出土したパンコンテナ 27 箱分の土器は弥生時代中期前半から後半のものが主体を占め、甕棺片や祭祀土器片も多く含まれる。堅穴住居跡は 1 辺が約 2.6 m と小型で主柱穴や炉跡は確認できなかった。弥生時代後期後半の土器とともに完形の石包丁が出土している。この他、多数検出したビットには須玖永田 A 遺跡と同様に礎板・柱痕が確認されたものがあり、これらは明らかに掘立柱建物跡の柱穴と判断される。調査時に柱穴の配列が確認できた建物跡は 1 棟のみで、棟数についてはなお検討を要するが 4 ~ 5 棟以上存在すると思われる。

注目すべき遺物としては 1 号土坑から矛とみられる青銅器鉄型、15 号甕棺墓方内からガラス坩堝が出土している。

小 結

調査は限定された範囲のため遺跡の全容は不明である



6. 調査区南東部（南西から）



7. 114号(右)・115号(左)甕棺墓（南西から）



8. 112号壺棺墓（南から）



9. 77号壺棺墓（南東から）

が、遺構の分布状況から遺跡の範囲は東西北の3方向に広がることは明らかで、壺棺墓を主体とする墓壙群は東西両方向へ、掘立柱建物跡は東方向へ延びだしている。僅かではあるが青銅器鋳型やガラス培塿も出土していることから、奴国の工房群の連なりが当地にまで及んでいたことが想定される。



10. 調査区中央部土器廃棄坑（南東から）



11. 遺構配置図 (1/150)

住…堅穴住居跡
土…土坑
土墓…土壤墓
廐…土器廐棄坑
数字標記…壙棺墓

6 百堂遺跡（2次調査）

所在地 春日市白水ヶ丘2丁目33・46・47番ほか

調査面積 831 m²

調査期間 1988年4月11日～5月19日

百堂遺跡は春日丘陵南西部の中位段丘上にあり、調査地は観音山から延びた小丘陵に挟まれた小谷部に立地する。

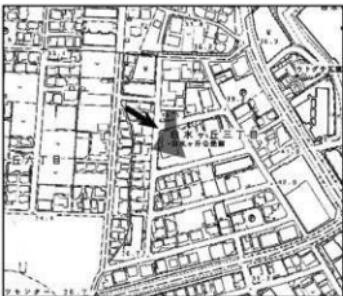
上白水地区の区画整理に伴う緊急発掘調査で、前年の試掘調査において溝、ピットを検出したことにより本調査を実施した。調査時は百堂遺跡B地点としていたが、平成16年の遺跡地図作成に伴い各遺跡範囲の整理・見直しを行った際に百堂遺跡A地点と統合したため、遺跡名・調査次数を百堂遺跡2次調査と改めた。

遺構・遺物

調査で確認した遺構は土坑12基、溝4条およびピット群があるが、全体的に遺構の密度は稀薄である。

土坑は方形、長方形、略円形を呈するものや不整形のものがあるが、いずれも出土遺物が少なく、時期や用途を判断することが難しい。しかし、縄文土器（押型文土器）や石器片のみを含むものがあり、当該期の遺構も2～3存在する可能性がある。

1号溝は幅約0.4～1mを測り、概ね南北方向に走るが南側で二股に分岐する。南東方向に分岐した先は、2号溝または3号溝に連続していた可能性が高い。4号溝は幅約0.6～1.2m、深さ35cm前後を測る。断面形は整った逆台形状を呈し、溝底は北側に低く傾斜する。いずれの溝



1. 調査地の位置 (1/5000)



2. 全景 (南東から)



3. 全景 (北から)



4. 12号土坑（北から）



6. 9号土坑（東から）



5. 4号土坑（東から）



7. 7号土坑（東から）

もやはり遺物が乏しいため時期を確定し難いが、須恵器・土師器片を若干伴っており、古墳時代から歴史時代のものと考えられる。1点ではあるが3号溝から鉄滓が出土したことは注目される。ピット群について建物跡と推定される配置をなすものは存在しない。

小 結

周辺地形から見ると今回調査の範囲は、遺跡の周辺部に当たり遺跡自体の中心部はおそらく南方へ広がっていたものと思われ、縄文時代の生活跡及び古墳～歴史時代の遺構が存在するものと推測される。



8. 陶器配置図 (1/200)

7 柏田遺跡（1次調査）

所在地 春日市下白水南7丁目144

調査面積 499 m²

調査期間 1988年7月15日～8月29日

柏田遺跡は春日丘陵西方の低位段丘上にあり、東西約170m、南北約420mの範囲に展開する集落遺跡である。これまでの確認調査等により縄文時代後・晚期、古墳時代、古代から中世にかけての遺構が確認されている。今回の調査地は那珂川中流域右岸の自然堤防上(微高地)で営まれていた水田に共同住宅建設の計画があがり、試掘調査を行ったところ遺構が確認されたため緊急発掘調査を実施したものである。

遺構・遺物

調査で確認した主な遺構は、古墳時代前期に埋没した2条の溝である。調査区南部を東西方向に走る1号溝は整った逆台形の断面形状を呈し、幅2m前後、深さ1m以上を測る。2号溝は1号溝の北側に検出した。溝幅は1号溝と同程度だが、深さは20cm程度と浅く、緩やかに湾曲している。いずれも溝底は東から西に向かって低く傾斜する。溝からの出土遺物には布留式土器など古式土師器片が比較的多



1. 調査地の位置 (1/5000)

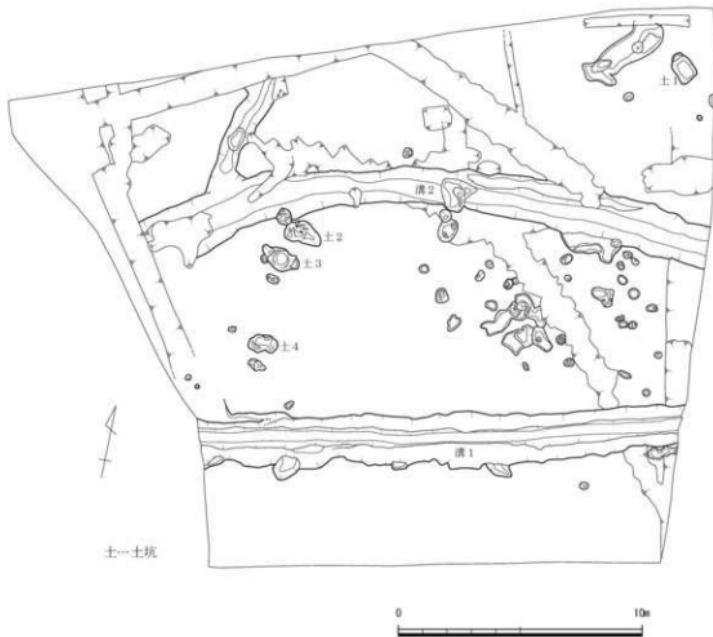


2. 調査区全景（北東から）

く含まれるが、総じて遺物量は少なくパンコンテナ10箱分である。このほか土坑4基とピットを検出しており、縄文時代後期から晩期とみられる土器片が出土している。

小 結

発掘調査で検出された遺構は密度が希薄で、出土遺物も調査面積の割に僅少なため、今回の調査地は遺跡の縁辺部に当たるものと考えられる。周辺で行われた確認調査や試掘調査の成果から、柏田遺跡の中心部は当調査地より南方にあると想定されるが、今回検出した溝には集落を区画する機能があったものと推察される。



3. 遺構配置図 (1/200)

8 宮の下遺跡（1次調査）

所在地 春日市昇町3丁目217番

調査面積 458 m²

調査期間 1988年7月15日～9月30日

宮の下遺跡は春日丘陵西部の小丘陵上、南北約140m、東西約90mの範囲に展開する弥生時代から古墳時代にかけて営まれた墳墓群である。調査地は一の谷遺跡が立地する丘陵の北先端部に位置する。從来戸建て民家であった土地に共同住宅建設の計画が上がり、緊急発掘調査を実施した。



1. 調査地の位置 (1/5000)



2. 調査区西半全景 (東から)



3. 調査区東半全景 (西から)

遺構・遺物

調査で確認した主な遺構は、甕棺墓33基、土塙墓15基、石蓋土塙墓2基、箱式石棺墓3基、祭祀遺構6基（溝状遺構含む）、溝5条である。甕棺墓は弥生時代中期前葉から後期前葉のもので、主軸が地形の傾斜と平行するものと直交するものがあり、直交するものの方が比較的古い傾向がある。副葬品としては後期の15号甕棺墓から円形銅製品5個以上、舶載鏡（鼈龍文鏡か）片、鉄劍片が出土しているが、甕棺 자체が取り出される盗掘を受けており、このほかにも副葬品が存在した可能性が高い。また、調査区西端に検出した弥生後期の2号石棺墓からは被葬者の首飾りと思しきガラス管玉約30個が出土した。この他、19号甕棺墓の掘方内とこれと重複する墓壙状遺構から鉄器、鉄斧が出土している。

土塙墓、石蓋土塙墓、石棺墓は概ね甕棺墓群より低位の北側に分布し、斜面裾部付近に集中する。殆どの墳墓の主軸は地形の傾斜に沿ってほぼ平行しており、凡そ2列に並行して埋葬された状況が看取される。時期を確定し得る出土遺物が乏しいため詳しく述べる年代は明らかでないが、遺構の重複状況からは甕棺墓の後に造られているものが多く認められ、甕棺墓より時期的に下る弥生時代後期のものと考えられる。

墳墓に伴う構及び祭祀遺構については、溝状の1号祭祀遺構の北側には埋葬遺構が殆ど認められないことから、墳墓群の北側直近を区画する溝が祭祀の場としても利用されていたことが想定される。1号



4. 15号甕棺墓（北から）



5. 3号石棺墓（北から）



6. 2号石棺墓（北西から）



7. 2号石棺墓 管玉出土状況

溝、5号溝も墳墓に伴う遺構と判断される。祭祀遺構や土坑からは、弥生時代中期の祭祀土器のほか金属器類や石器が出土しており、特に溝状の1号祭祀遺構から中期末の祭祀土器と共に出土した素環頭刀子や鉄斧、3号土坑から出土した青銅製鋤先は注目される。

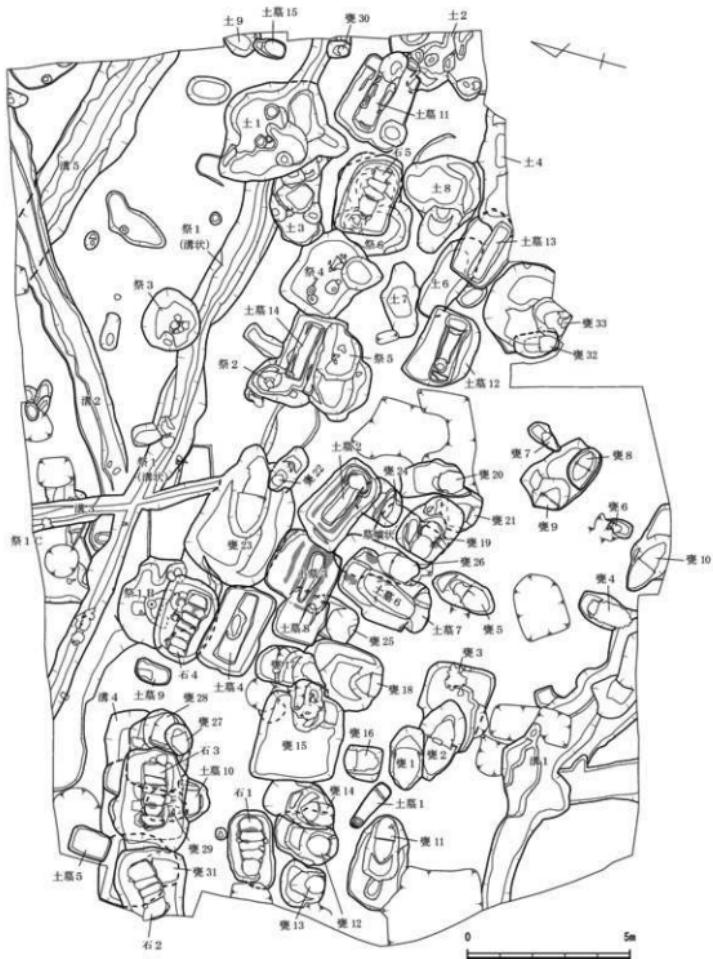
小 結

宮の下遺跡では、まず弥生時代中期前葉に甕棺墓群が形成され始め、後期前葉頃までは甕棺墓が多用されている。その後は土壙墓及び石棺墓、石蓋土壙墓が主流となり、弥生時代の終末期まで埋葬が行われたものと推察される。各時期、複数の墳墓に副葬品が伴うことや墓壇の規模が比較的大きいもののが存在すること、後期末まで埋葬が継続して営まれることなどの特徴が見られ、ここに埋葬された集団は奴国の中核たる須玖遺跡群内において、長期間かなりの地位を確保していたことが推察される。

遺跡の立地としては須玖遺跡群内では、王墓・王族墓群が存在する須玖岡本遺跡岡本地区から南方に1.3kmほど離れ、須玖遺跡群の西端に位置する墳墓群だが、奴国の王族墓集団に次ぐ有力な首長層の墓地であった可能性がある。



8. 3号土坑 遺物出土状態



壇…壇壝
石…石棺墓

土…土坑
墓壇状…墓壇状遺構

土墓…土壤墓

石…石棺墓（2～4）：石蓋土壤墓（1・5）

●…粘土

9. 遺構配置図 (1/150)

9 浦田遺跡（1次調査）

所在地 春日市須玖南3丁目142番

調査面積 567 m²

調査期間 1988年10月3日～12月10日

浦田遺跡は春日丘陵の西側に並行する低丘陵（曰佐丘陵）の北部に東西約120m、南北約115mの範囲にわたって展開する。調査地は遺跡の西端に位置し、丘陵西緩斜面上に立地する。従来、畠地・果樹栽培地として利用されていたが、共同住宅建設の計画が上がり緊急発掘調査を実施した。

遺構・遺物

調査で確認した遺構は弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡2軒、奈良時代と中世の溝9条、土坑3基、ピット多数である。調査区北部に北西方に開く小谷があり込み、ここに弥生時代後期の土器や須恵器、土師器を主体とする遺物包含層が堆積していた。

調査区の南部に検出した1号住居跡は東辺に張出し部を設ける方形の竪穴住居で、平面規模は5.5×3.9mを測り、検出面から床面までの深さは約30cmである。張出し部と東辺の床面をベッド状に一段高く設える。主柱穴は2個で炉と屋内土坑を備え、弥生時代後期末の土器が多く出土した。この北側に位置する2号住居跡は古式土師器が多く出土し、古墳時代初頭の竪穴住居と見られる。規模約5mの正方形を呈するが北西部を2号溝に切られている。1号住居跡と同様に壁溝を巡らすが柱穴や炉跡は明確ではない。

調査区を直線的に南西から北東方向に継続する2号溝は幅約1.5～3m、深さ



1. 調査地の位置 (1/5000)



2. 調査区南半全景 (北から)



3. 調査区北半全景 (南西から)

約1.4mを測り、横断面が逆台形状である。溝底は平坦で北東側に僅かに低く傾く。出土遺物は奈良時代の須恵器、土師器が主体をなし、パンコンテナ15箱分ほどが出土しているが、この中には溝東部から出土した輪羽口など注目すべき遺物が含まれる。この他の溝は深さ30cmに満たない浅いものばかりである。出土遺物から8号・9号溝は弥生時代後期、他の6条は古代から中世にかけてのものと考えられる。

3号土坑は深さ約1.4mを測る深い土坑で、須恵器、土師器、陶磁器片などが出土した。中世のものと考えられ、埋土の上位から出土した鉄滓が注目される。

小 結

今回の調査地については、当地と周辺を含めた地形や遺跡内での位置を考慮すると、遺跡の一角をしめるものの、中心は南方の丘陵上にあるものと推定される。浦田遺跡が所在する日佐丘陵の中央部には、弥生時代から古墳時代にかけての大集落遺跡である日佐原遺跡、弥永原遺跡が連なるように存在していたことからも、これら周辺遺跡との関連が意識される。



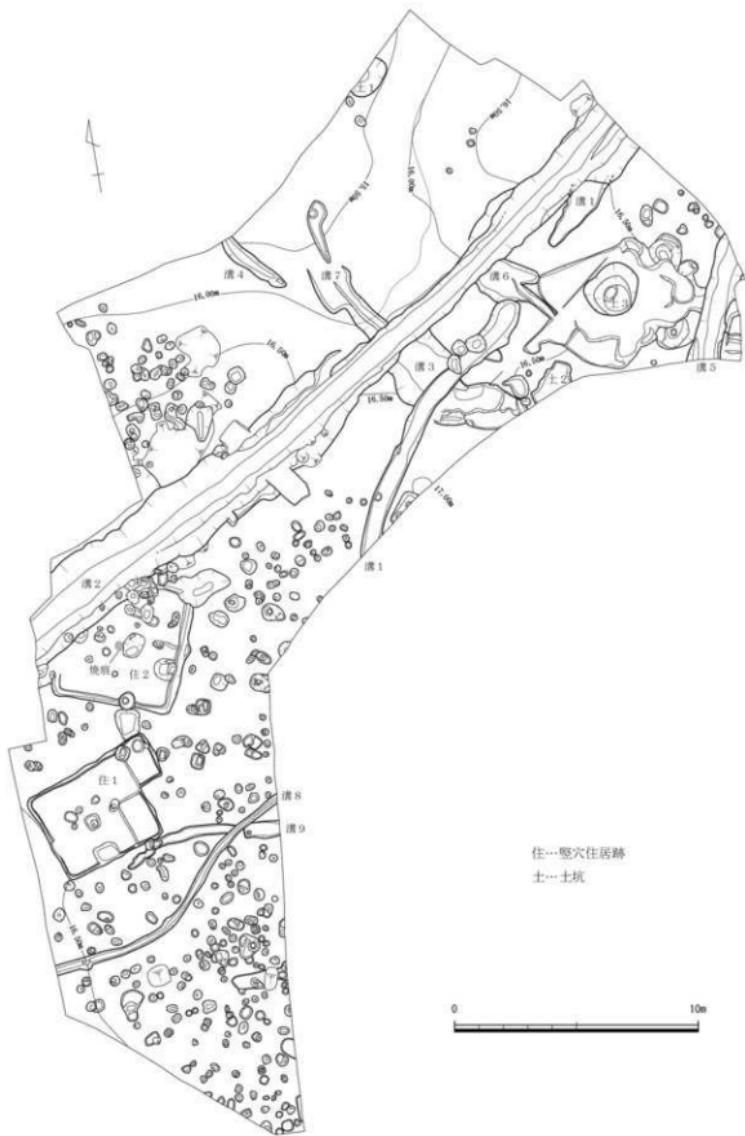
4. 1号整穴住居跡（北から）



5. 2号溝土層（調査区北東辺）



6. 3号土坑（北西から）



7. 遺構配置図 (1/200)

10 大牟田遺跡（1次調査）

所在地 春日市紅葉ヶ丘東9丁目157・158・160番

ほか

調査面積 811 m²

調査期間 1988年10月18日～12月23日

大牟田遺跡は春日丘陵南部に所在する大牟田池の南端に突出した小丘上の西斜面に立地する。標高50m前後を測り、南北約50m、東西約20mの範囲に広がる。当地周辺は小谷が入り組む丘陵地帯であったが、昭和60年頃に春日地区の区画整理事業等によって削平造成され宅地化が進行した。部分的な乱開発を受けて当遺跡の周囲は崖面となった所が多くあり、年々著しくなる崖面の崩壊が危ぶまれたため事前に実施した緊急発掘調査である。調査後、遺跡は宅地として造成され消滅した。

遺構・遺物

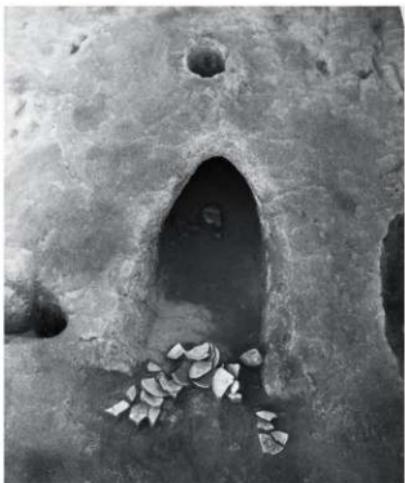
調査で確認した遺構は奈良時代の須恵器窯跡1基と土坑2基である。窯跡は標高45mから54mの急斜面に構築された全長約2mの小型の地下式登窯（窖窯）で、天井部が一部残存していた。窯の焚口下



1. 調査地の位置 (1/5000)



2. 調査区遠景（東から）



3. 1号窯跡（西から）

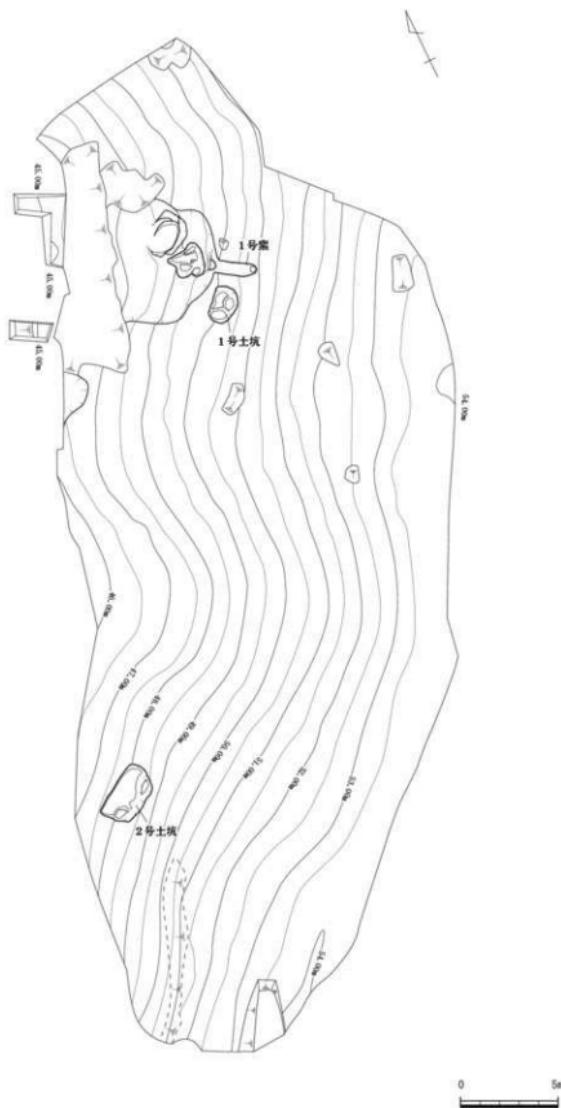


4. 1号土坑（西から）

方に $6 \times 5\text{m}$ の範囲で蓋杯や皿を主体とする多数の須恵器片を包含する灰原が広がっており、8世紀前半代に操業していたものと考えられる。窯体内や灰原から出土した須恵器にあまり大きな時期差は認められず、窯の操業期間は比較的短期間だったと考えられる。

小 結

当窯跡は南方の牛頭山山麓に広く展開する牛頭窯跡群に属する窯跡の一つと考えられるが、牛頭窯跡群の中で当該期の窯跡が単独で存在するのは珍しい。また、周辺といえる範囲には集落遺跡も未だ存在が知られておらず、不明な点を多く残す遺跡である。



5. 遺構配置図 (1/250)

てら や しき
11 寺屋敷A遺跡（1次調査）

所在地 春日市小倉4丁目1番

調査面積 302 m²

調査期間 1989年1月18日～3月18日

寺屋敷A遺跡は春日丘陵中央部の小丘上に立地する。弥生時代の集落に関連する遺構を主体として東西約220m、南北約120mの範囲に広がる遺跡である。共同住宅の建設に伴って実施した緊急発掘調査で、発掘調査当初は寺屋敷東遺跡と呼称していたが、平成16年の春日市遺跡地図作成に伴う遺跡範囲の整理・見直しにより、現在の寺屋敷A遺跡と改称した。

調査地点は遺跡の北東縁で東西に延びる丘陵の北斜面に位置する。予想以上に著しい削平を受けており、平坦面及び斜面においても当初想定された甕棺墓は検出されなかった。

遺構・遺物

今回の調査では中世の地下式壙1基、時期不明の土坑1基を検出したほか、丘陵北側斜面に土器等の遺物を多量に包含する土砂が厚く堆積する状況を確認した。この土器包含層は厚い部分では120cm以



1. 調査地の位置 (1/5000)



2. 調査区全景（北から）

上を測り、パンコンテナ 100 箱を超える遺物が出土した。出土遺物は弥生時代中～後期の土器を主体とするが、石製勾玉、石劍、石戈、石鏃、石斧、石鎌、石包丁、砥石、用途不明の鉄器、投弾など多様な石器や金属器、土製品が含まれる。また、泥メンコや古錢など近世の遺物も採集されている。

斜面ほぼ中央で土器包含層を掘り込む形で検出した地下式壙は、上面が大きく削平されて上部構造は不明な点が多いが、周辺地域の類例から 13～14 世紀初頭に造られたものと推察される。長軸 1.9 m を測る楕円形の底面形を有し、床面より 12～13 世紀に作られた古瀬戸灰釉瓶子、中国製褐釉壺の陶磁器 2 点が横倒しになつた状態で出土した。

小 結

今回の発掘調査では、調査区全体が大きく削平・擾乱されていたため、事前の試掘調査の結果から当初予想されていた弥生時代の遺構は確認できなかつたが、遺物包含層には大量の弥生土器が含まれることから、調査区南側の丘陵上には当該



3. 遺物包含層堆積状況（西から）



4. 調査区中央部遺物出土状況（北から）



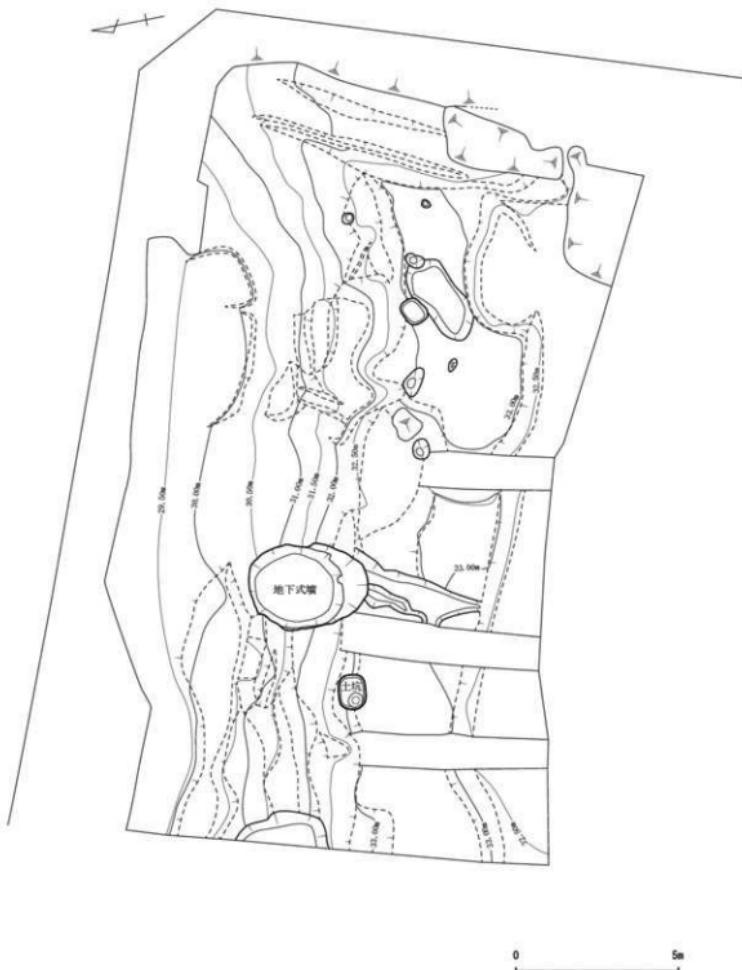
5. 地下式壙（南から）



6. 地下式壙内出土土器

期の集落が存在するものと推定される。

なお、中世の地下式壙から出土した2点の瓶子は供獻土器ではなく藏骨器として利用されたものと見られる。福岡周辺において類例の少ない貴重な資料であるが、美術工芸品としても優品である。



7. 遺構配置図 (1/150)

昭和61年度～昭和63年度
春日市埋蔵文化財年報

発行日 令和5年3月31日
編集・発行 春日市教育委員会
福岡県春日市原町3丁目1番地5
印 刷 大道印刷株式会社
福岡県春日市日の出町6丁目22番地